



研究調査報告

『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究

フランス都市風景の歴史的変遷を探る

熊谷 謙介

(非文字資料研究センター 研究員)

2013年3月、フランスにおける都市風景画分析に必要な現地調査を行う機会を得た。2013年度にまとめる予定の18世紀ヨーロッパに関する生活絵引第1巻の準備として、革命前の啓蒙期の都市風景画・風俗画を美術館等で実際に観覧したり、図書館等で資料調査したりするとともに、実際に絵が描かれた場から写真を撮影することで都市風景の変遷を確認することが、今回の視察の大きな目的であった。

ヨーロッパの18世紀の生活に見られる風俗を分析する上で、絵画が描かれたであろう地点に200年以上の時を超えて立つ意義とは何か。一つにはヨーロッパ、とりわけ戦争による破壊が比較的少なかったパリに特徴的なことであろうが、長い時を超えて保存あるいはそのままの形で再建されている建築物が多く、現在でも当時に近い環境を見いだせる場合が多いということがある。都市の拡大に伴ってそれぞれの街区の象徴的意味は変化していくけれども、残された物からたどっていく考古学的視線によって、過去の都市風景の復元を試みることはできるだろう。第二に、過去と現在の間に断絶（都市改造、災害、再開発…）が認められる場合でも、ゲニウス・ロキ（地霊）と言ってもよいような土地の記憶が都市生活者の中に残存していたり、過去の破壊の代償として新しい表象があてがわれたりする現象が見られ、都市の無意識といったものを分析する上でも重要に思えるからである。

とはいえ、実際の調査にあたっては多くの困難があった。視点場の同定（同定できたとしても道路・建物等で撮影が不可能な場合もある）、写真撮影の際の画角や視点の限界（多くの絵画では、写真に比べ画角が広く（ワイド）、視点が低い）などである¹。ここでの調査報告ではこうした美的問題はあえてとりあげず、一例を紹介することで、描かれているものとそれを取り巻く環境と

の関係から、都市風景の歴史的変遷を探ってみたい²。

Pont-au-change（両替橋）

両替橋はパリの中心シテ島と右岸を結ぶ橋であり、橋の上に両替商が多く店を構えていたことからその名が付けた。橋とはいっても店があまりに密集して立っていたので、通行人はセヌ川を見ることができなかったと言われている。中世以来、何度も橋は架け替えられたが、革命前夜の1786年から、ユベール・ロベールが描



図版1 ユベール・ロベール「1788年の、両替橋の家屋の取壊し」（1788）（カルナヴァレ美術館）



図版2 現在の両替橋（筆者撮影）

2 18世紀のパリ風景の視覚資料としては、とりわけ次の二つの画集を参照した。Alfred Fierro et Jean-Yves Sarazin, *Le Paris des Lumières : D'après le plan de Turgot (1734-1739)*, RMN, 2005（『啓蒙期のパリ』）、Françoise Besse et Jérôme Godeau, *Tableaux parisiens : Du Moyen Âge à nos jours, six siècles de peinture en capitale*, Parigramme, 2005（『タブロー・パリジャン』）。

1 こうした問題を建築の分野から論じまた実際に絵画を分析した研究として、次を参照。萩島哲『都市風景画を読む—19世紀ヨーロッパ印象派の都市景観』九州大学出版会、2002年。

く景観図（図版1）に見られるように橋の上の家屋が取り壊されることになった。

古代ローマの廃墟を多く描いた「廃墟のロベール」が、革命前夜のパリで現在進行形の廃墟をルポルタージュするというテーマも興味深いが、二つの図版を見比べて気づかされるのは、橋を渡って正面右側の建物がほぼそのままの形で残されていることである。とりわけその左端に位置する塔はコンシエルジュリーの時計の塔であり、中世においては王の居室として使われていた（図版3）。その後、コンシエルジュリーは牢獄となり、フランス革命中にマリー・アントワネットが囚われた場所としてとりわけ有名となるが、中世から現在まで、幾度もの火災と再建を経て現在までその形をとどめていることは意義深い。

また、橋の上の家屋の取り壊しは、近代都市形成のメルクマル（指標）として重要であるが（偉大な例外としては、今なお宝飾店が立ち並ぶフィレンツェのヴェッキオ橋がある）、その理由としては、火事の危険や通行の妨げになったことがしばしば挙げられる。しかし、18世紀後半のパリを鮮やかにスケッチしたメルシエの『タブロー・ド・パリ』では、むしろ新鮮な空気の流れを妨げることが問題にされている。「橋の上に建てられた家々は、[……] 空気の流れが、町を端から端まで吹き抜けるのをさまたげ、また川岸までやってきた街路の腐った空気が、セーヌ川の蒸気とともに運び去られるのをさまたげている」³。図版4を見ると気づかされるように、橋は5階建ての高層の建物で覆われており、そこから図版1に見られる瓦礫の山の大きさにも納得がいくだろう。高層の家屋によって囲い込まれたミASM（瘴気）は、パリで生活する人々の衛生状態を悪化させていたのであり、その抜本的な改善策が講じられるのは、19世紀中盤のオスマン改造を待たなければいけない。

映画化もされたパトリック・ジュスキントの小説『香水』は、このような悪臭ぶんぶんたる18世紀のパリを舞台とした作品だが、天才的な嗅覚をもつ主人公が弟子入りをする調香師は、この両替橋に店を構える男であったことも言い添えておきたい。そして、主人公が店を去っ



図版3 「時計の塔」の名の由来となった、フランス初の掛け時計（筆者撮影）



図版4 ニコラ＝ジャン＝バティスト・ラグネ《ノートルダム橋と両替橋の間で行われた船乗りたちの水上槍試合》（1756）（カルナヴァレ美術館）

たまさしくその日の晩、シャンジュ橋の西方、第三と第四の橋桁が崩れ、香水店は消失、国王の命令でパリ中の橋から建物を撤去するきっかけとなったという、歴史を踏まえたエピソードも⁴。一枚の絵画から見えてくる往時の都市環境は、現代のパリのそれと断絶を持ちながら、コンシエルジュリーという残存する建物から、さらには香水文化という観点から現代と交錯するものである。今回の研究調査で得られたこうした視点を生かしつつ、今後も絵画に描かれている同時代の風俗について、感覚や民衆的なものといった、文字に表しがたいものをおろそかにせずに分析を進めていきたいと考えている。

3 メルシエ『18世紀パリ生活誌（上）』原宏編訳、岩波文庫、1989年、126頁。

4 パトリック・ジュスキント『香水—ある人殺しの物語』池内紀訳、文藝春秋、1988年（文春文庫、2003年）。